

「見上げる」視点／「俯瞰」の視点

～花火鑑賞にみる視覚の考察～

主査：八谷 和彦教授

副査：林 卓行教授（論文第一副査）・小谷 元彦教授（作品第一副査）

1319922 島田 清夏

・研究のタイトル

「見上げる」視点／「俯瞰」の視点
～花火表現における視覚の考察～

・論文要旨

筆者が最初に花火を魅了されたのは、花火を真下から観る経験をした時だった。その時、恐怖と同時に崇高な畏怖のような感情を生まれて初めて抱いた。この感情はどこから生まれるのだろうか。人間が作り出す芸術作品で、このような感情を生む作品はあるだろうか。どうしたらそのような作品が作れるのか。こうした疑問が花火作品を制作・研究するに至った動機であった。

日本での花火といえば、夏の風物詩・文化であり、そして工芸の一つと考える人が多いのではないだろうか。花火の基である火薬は、それまで戦争など破壊行為の道具として発展して来た歴史があるが、しかし花火そのものの歴史を紐解いていくと、観賞用の花火は14世紀のイタリア・フィレンチェに端を発し、科学、宗教、芸術と横断的に研究され発展してきた歴史がある。同時に王族らパトロンの存在と彼らのために制作された歴史も存在する。

一方、17世紀に花火が日本に入って以降、他に類を見ない独特な文化を形成することとなる。慰靈や厄祓い、神への奉納といった目に見えない者たちへの敬意につながった。それは西洋の権威を示す花火とは違い、民衆のための文化となっていました。

筆者の探究する花火の持つ崇高や畏怖の感情は、花火を「見上げる」という行為に関係があるのでないかと考え、まず「見上げる」行為のもたらす心的作用について探究することになった。これは、先に述べた西洋の花火と権威との関係性と、同時に日本の目に見えない者

(自然)を敬う気持ちと両方に通じる要素になるとえたためである。こういった背景により、花火と鑑賞者の位置関係による感情や認知の変化を探ることとした。

本研究のテーマである「俯瞰」の視点はこうした経緯から生まれた新しい視座への研究である。2010年代より民間に普及したドローンであるが、人類の俯瞰の歴史もまた花火と同様に、戦争や権威と密接に結びついてきた歴史がある。しかし、民間にドローンが普及するようになり、誰もが上空150mからの俯瞰視点を自由に操れる視座を獲得した。筆者は2019年より「俯瞰」で花火を鑑賞するための装置を制作し続けている。その際、撮影にドローン搭載カメラを使用することで、「俯瞰」することで見えてくる世界を捉えようと試みている。

以上より、「見上げる」視点と「俯瞰」の視点がもたらす世界の捉え方の変化を、作品を通してことで、新たな花火の鑑賞のあり方を検証することを本研究の位置付けとする。

本研究では、研究背景、花火の歴史、文化的背景などを述べた上で、花火と鑑賞者の位置関係より生まれる感情や認知を分析するために、独自に以下の3つのカテゴリーに分けることを起点とする。

1. 見つめる(線香花火)
2. 見上げる(打ち揚げ花火)
3. 俯瞰(新規)

1の線香花火などに見られる花火を「見つめる」行為について分析。火を見つめる原初の体験から湧き上がる感情のベクトルを、時間軸と詩性、ガストン・バシェラールが著書「火の精神分析」で述べている「内省」とを重ねて論を展開する。

次に2の打ち揚げ花火に見られる「見上げる」行為について論じる。ここでは、筆者の経験から崇高や恐怖といった感情に焦点を当て、発達心理学、宗教、生態学的視覚論などから考察。見上げる行為と崇高・恐怖との関係性を論じる。また、花火を真下から撮影し、見上げることと平和への祈りをテーマにした過去作を紹介。制作意図と過程を述べる。

これらを受け、新たな3.「俯瞰」で見る花火について提唱。特に俯瞰映像の歴史と、俯瞰の映像の高さの二つを軸に独自に以下のように定義し論じる。

1. 戦闘機からの俯瞰視点
2. 人工衛星からの俯瞰視点
3. ドローンからの俯瞰視点

1. 戦闘機からの視点では、ポール・ヴィリリオの「戦争と映画」より、人類が最初に手に入れた俯瞰の視点を述べ、俯瞰がもたらした影響を展開していく。

次に2の人工衛星からの視点では、宇宙規模での俯瞰を考察。また、限られた者だけが管理

できる宇宙規模の俯瞰視点とその視点のもたらす意味を探る。

最後に作品に採用している 3 の民間ドローンの俯瞰の視点について考察。1 や 2 とは異なり、3 のドローンは市民が自身の立ち位置から 150m 上空を自由に操作し、自分の位置を俯瞰で確認することのできる視座であり、その開かれた俯瞰の視座の持つ意味と可能性を論じる。

以上の論を受け、俯瞰をテーマにした 2 つの過去作を紹介し、花火を俯瞰して鑑賞する装置を用いた実験的パフォーマンスと、ドローン撮影による無観客花火の視覚表現を解説する。コロナ禍における無観客花火という状況がドローンによる視点の重要性を際立たせ、これにより花火鑑賞に新たな意味をもたらすこととなった。

終章では、俯瞰視点が鑑賞者にもたらす新たな価値と経験について考察し、視点の変化が芸術鑑賞に及ぼす影響を論じる。花火を通じて得られる視覚的体験の多様性と、それによる感情や認知の変容をまとめ、論を閉じる。(1,999 文字)